

月例研究会（2005年11月30日）

米田佐代子著『平塚らいてう』
の批判的検討

松尾 純子

報告は、同タイトルの草稿の読み上げとそこでは検討対象外とした研究史整理を行なった。報告の目的は、米田佐代子著『平塚らいてう—近代日本のデモクラシーとジェンダー』（吉川弘文館、2002年）の批判的な検討が、読書ノートの水準に達しているかの判断、また、批判のために試みた叙述方法の妥当性に関する評価を求めることにあった。ここでは研究史整理を中心にまとめる。

平塚の先行研究には、彼女の著作におおむね依存した小林登美枝著『平塚らいてう』（清水書院、1983年）と井出文子著『平塚らいてう—近代と神秘』（新潮選書、1987年）が評伝の代表作としてあり、平塚の生涯の一時期に限定した研究は多数ある。

米田2002は、従来「神秘」「謎」と称されてきた人物の生涯の全体像の見取り図を提示し、平塚の著作の単なる引用でなく、本格的な分析を加えた研究書である点に意義がある。

しかし、同書が明らかにした平塚の思想と行動の特徴を踏まえてさらに検討すると、著者が指摘し得なかった点を指摘しうる。一つは平塚の生涯を時期区分するにあたっての関東大震災の画期性であり、もう一つは母性主義の歴史的意義である。さらに、「平塚は脱出という抵抗様式によって突出した歴史的な存在となった」という研究上の重要な視点も得られた。

また、同書が明らかにした諸点を著者自身が

統合できなかった理由も研究課題であると指摘し、同書の書評者の牧原憲夫（『歴史評論』655号、2004年）の見解を紹介した。

近年注目できる平塚研究としては、『平塚らいてう』著書集（大月書店、1984年完結）未収録の『輝ク』所載評論を分析した大森かほる著『平塚らいてうの光と蔭』（第一書林、1997年）や、今井小の実著『社会福祉思想としての母性保護論争—“差異”をめぐる運動史』（ドメス出版、2005年）がある。

大森1997には、平塚の戦争協力発言が彼女の思想の一貫性と深く関連することを示す史料の引用と分析がある。

今井2005は、母性保護論争から母子保護法成立までの過程（1918～37年）を社会福祉思想として再評価することを目的としている。その他、エレン・ケイの思想を分析しその関連で平塚にも言及した加藤秀一著『「恋愛結婚」は何をもたらしたか—性道德と優生思想の百年間』（ちくま新書、2004年）、子どもを耐久消費財か公共財かと検討する視点から育児手当の国庫支出の是非を検討し、子どもの生存権の観点から同手当肯定を結論した赤川学著『子どもが減って何が悪い!』（ちくま新書、2004年）といった現在の研究段階から考えると、平塚の母性主義の歴史的意義の評価はなお今後の研究課題である。

質疑応答と討論で、私事を語らないアカデミズムの方法が米田の平塚研究上の制約となったとの仮説から、批判の根拠として私事を語る方法を試みた点が、批判の方法としても具体的な論証としても難点が多いとの批判を受け、再考した結果、報告後に私事を表明した部分の削除と構成変更を行なった。

修正稿は読書ノートとして本誌前号（567号、2006年2月）に掲載された。

（まつお・じゅんこ 法政大学大原社会問題研究所

兼任研究員）